

11月14日のウクライナ情報

安齋育郎

①ウクライナとガザの紛争が歴史的に見て同根である(東洋経済 ONLINE, 2023年11月11日)

的場 昭弘 : 哲学者、経済学者

今、世界を揺るがしている戦争は2つの場所、ウクライナとガザで起こっている。

ウクライナとガザ、地図上で見ると、とても離れた地域である。しかも、スラブ人とアラブ人、正教会とイスラム教徒、ユダヤ教徒、いずれをとっても共通点が見つからない。

あえていえば、アメリカとロシアが深くからんでいることだけである。ただ、地政学的東西対決のフロントとして、2つの地域が深く結びついていることはわかる。

しかし、過去の歴史をさかのぼると意外なことに気づく。それは、これらの地域は同じオスマン帝国の中にあっただけである。かつてオスマン帝国は、黒海の北部(ウクライナ)と、中東地域(ガザ)を領土に組み込んでいた。つまり、両地域とも同じ帝国の版図の中にあっただけである。

その2つの地域が、今戦争に陥っているのは偶然ではない。それはこの巨大な帝国、オスマン帝国の崩壊から、20世紀の歴史、そして21世紀の歴史の変動が始まり、いまなおその終着点を求めてさまよっているからである。

■19世紀4大帝国のせめぎあい

19世紀までのヨーロッパの諸国家の布置を見ると、オーストリア帝国、プロイセン帝国、ロシア帝国、そしてオスマン帝国の四大勢力がしのぎを削っていた。そこに、フランスとイギリスといった国民国家の力が増大し、その力が日増しに強くなっていった。

その結果が、ナポレオンによるフランスの拡大と各地で起きた国民国家を目指す民族独立運動であった。ウィーン体制といわれる1815年以降の体制は、国民国家へと移行していく流れの中で締結された体制であった。

その結果、各地で民族独立運動が盛り上がる。イタリア、ドイツ、ポーランドなどで国民国家の統一を求める青年運動がそれだ。それは、やがてオーストリア帝国やドイツ帝国、ロシア帝国、そしてオスマン帝国まで波及し、世界を揺るがす大変動を生み出す。その現れの1つが、1853年から始まるクリミア戦争であった。

この戦争は、オスマン帝国の解体を意味する戦争であり、かつその領地をどの国が分け合うかという「ライオンの分け前」の戦いであった。その結果、これらの地域をフランスとイギリスという国民国家が勝ち取ったことで、オスマン帝国のみならず、ロシア帝国、オーストリア帝国、プロイセン帝国の力は弱まっていく。

ロシアでは農奴解放、ウクライナの民族主義の勃興、ドイツの統一、オーストリアとハンガリーの同君連合の成立である。

東欧の帝国は民族独立問題を受けることでさまざまな改革を行ったが、結局解決することはできなかった。そうして、各地で民族独立運動が起きた。

そこで大きな影響を受けたのが、マイノリティーの民族だった。帝国の崩壊は、マイノリティー民族への弾圧を生み出した。ロシアではユダヤ人に対するポグロム(ユダヤ人に対する集団暴力)が起こる。

ポグロムを逃れたユダヤ人は、プロイセンやオーストリアなどに移住していったが、500万以上のユダヤ人が住んでいたロシア帝国、とりわけウクライナのユダヤ人社会の崩壊は、西欧社会に大きな

社会的危機をもたらす。

この危機の中で、社会主義運動に参加するユダヤ人も大勢生まれた。トロツキー、ルクセンブルク、ジノヴィエフ、マルトフなどロシア革命で大活躍をする面々は、こうした流れを受けたものであった。ロシア革命の原動力の1つがロシア帝国のポグロムに対する抵抗であったともいえる。

一方、オーストリア帝国やドイツ帝国へ逃げのびたユダヤ人は、オーストリアで難民問題を引き起こす。ポグロムによる西欧へのユダヤ人の移動は、西欧人に反ユダヤ主義をもたらす。これがオーストリアのユダヤ人ヘルツルによる、シオニスト会議(1897年)を生み出す。

■ポグロムとユダヤ人問題

ユダヤ人、とりわけウクライナ地域から来たユダヤ人を最終的にどこに落ち着かせるかという問題が、シオニズム問題であるが、そもそもユダヤ人に対して、長い間寛容ではなかった西欧では、東欧に比べユダヤ人の数はそれほど多くはなかった。

ユダヤ人の多くは、イスラム圏と正教会圏にそれぞれセファラードとアシュケナージとして暮らしていた。

急に増えてきたユダヤ人に対する西欧側の批判は、西欧社会の重要問題となる。とりわけそれに動いたのがイギリスであった。

イギリスは、ユダヤ人たちの移民先を探す。イギリスとフランスは、オスマン帝国が崩壊する中、中東地域に触手を伸ばしていた。こうして第1次大戦が始まり、オスマン帝国は完全に崩壊し、その支配下にあった中東地域はイギリス・フランスの植民地となる。イギリスは、その中でパレスチナ地域をユダヤ人移民のための基地とすることを決める。

「バルフォア宣言」が1917年に出されるが、そこで初めてユダヤ人の国がパレスチナで建設されることが決まる。もちろん、そこに住むパレスチナ人は第1次大戦後の国民国家成立のための努力を行っていた。

しかし、シリアやレバノン、ヨルダンの独立国家案は認められ、パレスチナだけが民族国家独立の機会を永遠に奪われてしまうのである。もちろん、中東のどの民族に対しても、欧米列強が主導したヴェルサイユ会議では、独立国家の存在を認めることはなかった。その独立は第2次世界大戦後を待つしかなかったのであるが、パレスチナにその機会が来ることはなかった。

パレスチナへのユダヤ人の移民は、最初から国家形成ありきであったわけではない。圧倒的な人口差を持つ地域での国家形成はありえない。イギリス政府の後押しだけでなく、イギリスのロスチャイルド、モンテフィオーレなどのユダヤ系の資本家の資金供出、アメリカのユダヤ系資本の資金供出によって、まずは土地を購入し、そこにユダヤ人入植地をつくるという形で初めは進められた。

これを加速したのが、1930年代のナチスによるユダヤ人排斥運動である。これによってパレスチナへのヨーロッパからの移民はどんどん増えていく。パレスチナの住民は次第に僻地に追いやられ、それに対する抵抗運動が始まる。

1939年にはユダヤ人人口はすでに30%になっていたという。「軒を貸して母屋を取られる」という言葉があるが、まさに増大するユダヤ人の人口と西欧による後押しは、パレスチナの人々を周辺に追いやる。

第2次世界大戦以後、ヨーロッパから絶望したユダヤ人の大量入植が始まる。荒れ果てたドイツ、ポーランド、ウクライナ、ロシアからの入植者が新たな人口を形成していく。パレスチナ人は、戦前に抵抗運動を行っていたが、本格的な抵抗運動は4回にわたる中東戦争であった。

しかし、そのたびに西欧社会の支援を受けるイスラエルは確固たる領土を確保し、パレスチナ人は、

イスラエルの外の国に移動するか、イスラエルの中のガザ、そしてヨルダン川西岸にほそぼそと生きるしかなくなる。こうして幽閉された大地に暮らすガザが生まれたのだ。

ロシア領土となったウクライナのユダヤ人問題が、イスラエルを生み出し、それが今、ガザでパレスチナ人と戦っているというわけである。(以上、ジャック・アタリ『ユダヤ人、世界と貨幣』的場昭弘訳、作品社、2015年参照)

■帝国の崩壊と終わりのない紛争

19世紀からの歴史を見ると、ウクライナの問題とガザ問題は共通項をもっていることに気づく。

それは、オスマン帝国の崩壊、そしてオーストリア、ロシア、ドイツといった中東から東欧にかけて支配していた大帝国が、国民国家に取って代わったことによって生まれたマジョリティーの民族とマイノリティーの民族の闘争という問題である。

この問題は、ユダヤ人やパレスチナ人だけの問題ではない。これらの帝国には、民族や言語も違う人々が長い間共存してきたからだ。西欧から見ると、民族統一と言語統一による国民国家は当然のことのように見えるが、これらの混淆した地域でそれを行うことは至難の業といってもよい。

帝国という枠の中で、言語も民族もあまり意識せず生きていた時代は、ある意味幸福であったといえる。しかし、そこに民族統一と国民国家への運動が生まれる。そうになると、主たる民族と弱小民族との区分けが生まれ、弱小民族は弾圧を受ける。

ポーランド独立運動やロシアの独立運動は、ウクライナの民族を弾圧し、ウクライナの独立運動はユダヤ人や、ルテニア人、モルダヴィア人、ベッサラビア人、タタール人などへの弾圧へと進む。こうして迫害が始まる。「民族浄化」という概念は、まさにこうした民族運動から始まっていった。

こうしてウクライナのユダヤ人は追放され、パレスチナへ至り、イスラエルという国民国家をつくることになる。しかし、今度はそこで、ユダヤ人ではない民族を弾圧することになる。まさに皮肉というしかない。しかも、そのパレスチナも民族独立と国民国家形成を求めて、イスラエルのユダヤ民族と真っ向から対立しているというのだ。

お互いに単一民族による国民国家実現という、19世紀の国民国家の幻想の中でうごめいているわけだ。もちろんアメリカのような多民族国家はあるが、主たる民族と人種による差別と弾圧は後を絶たない。それは人々が、帝国にあったような、ある意味無関心、ある意味寛容な態度を持たないからである。個々人の独立が、かえって弱い民族や人種を差別していくのである。

その意味で、わずかな時期であったが、19世紀末のウィーンはこうした帝国のある種の理想型であったかもしれない。そこで花開いたユダヤ人の社会の文化は、西欧の歴史に燦然と輝いているからだ。

世に国際都市というものがあれば、あの時代のウィーンだったのかもしれない。オーストリア人の中でユダヤ人が少数であったことが、寛容の中で華やかな世紀末文化を生み出したのだ。しかし、このウィーンもポグロムから徐々に変わる。ユダヤ人の数が増えたことで、アンチセミティズム(ユダヤ人蔑視)の力が増したのだ。

国民国家として均一化されれば、人は他と違うものに脅威を感じる。そこに差別が生まれる。これを超えるには、多民族を包括する大きな帝国が必要であったのだ。すでに、オーストリア帝国は多民族国家であったが、次第に国民国家の勢いに潰されかけていたともいえる。

■未来の国家とは

こうした帝国に代わる理想的モデルとして構想されたのが、国民国家ではなく、連邦国家であった。民族集団の集まりではなく、インターナショナルな集まりである連邦国家である。

しかし、あくまでもそれは理想である。ソ連、アメリカ、EUはそうした連邦を目指したものであった

が、どこかで狂ってしまった。比較的うまくいっているのは、スイスであろうか。

スイスは Confoederatio Helvetica ともいう。ヨーロッパで CH と書いた車があったら、それはスイスの車だ。「ヘルベティア連邦国家」だ。スイスは歴史も文化も違う地域を 19 世紀に人口的にまとめて作った国である。

ドイツ語で Eidgenossenschaft という言い方もある。直訳すると「誓いでまとまった共同体」という意味である。現実はともあれ、未来社会はかくあるべきなのだろうか。



第 2 次世界大戦中、ポーランドで迫害に遭ったユダヤ人の写真
(写真・Jakub Porzycki/NurPhoto/共同通信イメージズ)(東洋経済オンライン)

<https://news.yahoo.co.jp/articles/73003ab2dcca1fff987b417fa4e44d337222f11c/images/000>

②アラブ人は 400 年間、平和に暮らしていたのに…「パレスチナの飛び地・ガザ」が主戦場になった歴史的理由(President, 2023年11月10日)

山崎 雅弘(戦史・紛争史研究家)

パレスチナ自治区「ガザ地区」を実効支配するイスラム組織「ハマス」とイスラエルとの戦争が激化している。なぜガザ地区が戦争の舞台となってしまったのか。戦史・紛争史研究家・山崎雅弘さんの『新版 中東戦争前史』(朝日文庫)より、一部を紹介する――。



■ガザ地区の面積は「東京都の 6 分の 1」

ガザは 1987 年にイスラエル軍に対するパレスチナ人の一斉蜂起「インティファダ」が発生した場所だったが、それから 20 年が経過した後も、同地に住む人々の生活環境はほとんど改善されていなかった。

現在「ガザ地区」と呼ばれている領域は、総面積約 360 平方キロの乾燥した帯状地帯であり、南西部でエジプトとの国境線が 11 キロある他は、イスラエルと東地中海に両脇と北東部を囲まれた「三面楚歌」の形となっている。

地中海の海岸線に沿って北東から南西へと伸びる、ガザ地区の中心軸附近での長さは約 42 キロで、海から内陸への奥行きは、広い場所では 12 キロあるが、最も狭い場所では 6 キロしかなく、日本に例えるなら面積で東京都の約 6 分の 1、領土の長さは渋谷から横須賀あたりまでという、比較的小さな土地である。

■地中海沿岸の栄華盛衰を見守ってきた土地

ただし、ガザ地区が現在のような形状で周囲から隔絶されたのは、1949 年に第一次中東戦争が終結して以後のことで、それまでは周囲の領土(パレスチナ)と一体化した形で、地中海沿岸に次々と現れては消えた王国や帝国の栄華盛衰を見守り続けていた。

新石器時代の紀元前 6000 年頃には、この附近で人間が生活していた痕跡があり、紀元前 1175 年頃には、古代エジプトが軍事拠点置いていたガザを、東地中海で覇権を確立したペリシテ人が奪い取った。

その後、紀元前 1020 年頃にガザ東方のエルサレム附近でヘブル(ユダヤ)人王国「イスラエル」が誕生すると、同王国はダビデ王の下で支配権を拡大、紀元前 1000 年頃にはガザ周辺もイスラエル王国の領土へと編入された。

■16 世紀からの 400 年間は平和な時代だった

しかし、紀元前 922 年にイスラエル王国が分裂して衰退すると、ガザの支配者はアッシリア、バビロニア、ペルシャ、ギリシャ(マケドニア)、ローマへと移り変わり、紀元後 70 年にはイスラエル王国の末裔であるユダヤ人たちがローマ人にこの地から追放されて、海外への離散(ディアスポラ)を強いられることとなった(本書の第一章を参照)。

1099 年、聖地エルサレムの奪回を目指すヨーロッパのキリスト教勢力(十字軍)が地中海沿いの進撃路に位置するガザを占領し、これをガドレスと改名した。

だが、13 世紀初頭に十字軍が敗退すると、パレスチナは再びトルコ系のイスラム勢力によって占領され、ガドレスの地名はガザへと戻された。そして、1516 年にオスマン帝国がパレスチナの支配権を握ると、ガザ附近のアラブ人たちはそれから 400 年間、同帝国の治下でイスラム社会を築いて平和な生活を営んでいたのである。

■悪化の一途をたどったパレスチナ難民の生活

1948 年から 49 年にかけて戦われた第一次中東戦争(第三章を参照)でのエジプト軍の奮戦により、地中海沿岸のガザ地区は建国当時のイスラエルの領土には含まれず、暫定的に隣国エジプトへと併合された。

だが、辛うじてアラブ側の支配地に留まった狭いガザ地区には、イスラエル支配地域から逃れてきた大勢の難民が流入し、その数はパレスチナ難民全体の 26 パーセントに当たる、19 万人に達していた。

それから 18 年後の 1967 年 6 月 5 日、イスラエル軍はエジプトに対する奇襲攻撃と共に第三次中東戦争(第五章を参照)を開始し、ガザ地区は再びイスラエルの占領下に置かれることとなった。

この戦争での大勝利により、イスラエルの国土は一挙に 4 倍以上へと拡大したが、ガザ地区では従来のパレスチナ難民に加えて、当初から同地に住んでいたパレスチナのアラブ人も、イスラエルの占領統治下で自由を奪われた生活を強いられることとなった。また、イスラエル政府は、ただでさえパレスチナ人の人口密度が高いガザ地区内にユダヤ人の入植地を次々と開設し、自国民のガザ地区への入植を積極的に推進する政策をとった。

その結果、ガザに住むパレスチナ人はますます狭い土地へと押し込められた上、条件のよい肥沃な土地は、ほとんどがユダヤ人入植者によって奪い取られていた。

■精神的な拠り所となったのはハマスだった

職のないパレスチナの若者は、屈辱と不条理への憤りを胸に秘めながら、彼らが「自分たちの土地」と見なす場所に入り込んできたユダヤ人入植者の家を建てる建設工事に、作業員として従事せざるを得ない状況へと追いやられた。

1987 年の「インティファダ」発生の背景には、こうしたガザのパレスチナ住民の間で鬱積(うっせき)した不満と怒りのマグマが存在していた。その後、1993 年の「オスロ合意」と 1995 年の「オスロ・ツー」(第九章を参照)により、ガザをめぐる情勢は改善の兆しを見せたが、翌 1996 年に第一次ネタニヤフ政権が発足すると、イスラエルの政策は再び、パレスチナに対して非宥和的な方向へとシフトしていった。

そんなガザ地区において、貧困と絶望の中で日々を暮らす人々の支持を集め、精神的な拠り所となっていたのが、アハメド・ヤシン師を指導者とする「ハマス」だった。

第九章で述べた通り、ハマスが創設されたのは、ガザでインティファダが起こった直後の 1987 年 12 月 14 日だった。この時点で、ガザ地区には 95 万人のパレスチナ人が住んでいたが、その約半数に当たる 45 万人は難民として流入した人口だった。

■イスラエルは「ハマス殲滅作戦」を開始

2001 年 2 月の首相公選で、シャロンがイスラエル史上最大の得票率(62.6 パーセント)を得て大勝利を収めると、彼はハマスに対して徹底的な殲滅作戦を開始した。その中でも、国際社会でとりわけ大きな非難を浴びたのが、ハマスの幹部を狙い撃ちにして次々と殺害する「ターゲッテッド・キリング(標的殺害)」と呼ばれる作戦だった。

最初のうち、イスラエル軍の標的(ターゲット)となったのは、自爆攻撃を計画・準備する現場レベルのハマス幹部だけだった。だが、この手法では一向に埒があかないと判断したシャロンは、ハマスの最高幹部をも標的にすることを許可し、2003 年 6 月 10 日にハマスのナンバー 2 であるアブドゥル・アジズ・アル・ランティシの自動車に対して、イスラエル軍のヘリコプターがミサイルを発射するという事件が発生した。

■ハマス指導者を殺害する一方、ガザ地区から撤兵

この時にはランティシは辛くも生き延び、ただちに自爆攻撃による報復が行われたが、シャロンはあきらめなかった。2004 年 3 月 22 日、早朝の礼拝を終えて車椅子でモスクから出たヤシン師と彼の護衛二人が、イスラエル軍ヘリのミサイル攻撃を受けて即死し、4 月 17 日には、再度標的となったナンバー 2 のランティシも殺害された。

こうした暗殺行動と並行して、シャロンは 2004 年 6 月 6 日に閣僚を召集し、ガザ地区全域と西岸地区の 4 カ所からユダヤ人入植地を撤去するとの方針を伝えた。シャロンはそれまで、対アラブ強硬派のシンボリック的存在と見なされていたため、パレスチナ側への譲歩とも受け取れるこの政策変更は、

リクード党内部でも激しい非難に晒された。

だが、シャロンはイスラエルの存続にはガザ地区の放棄もやむを得ないとの考えから、ガザ地区全体の 5 分の 1 を占めるユダヤ人入植地と、同地に駐留するイスラエル軍の撤退を強行し、2005 年 9 月 12 日には、ガザ地区のユダヤ人は完全に姿を消した。

■「二つの国家の共存」とは正反対の方向へ

ガザ地区からの撤退完了から 2 カ月後の 11 月 21 日、シャロンは入植地の撤退策への反対論が根強いリクード党党首を辞任して同党を脱退し、翌 22 日に新たな政党「カディマ(前進)」の設立を発表、自ら党首に就任した。11 月 28 日、シャロンはカディマの基本政策を、次のように説明した。

「イスラエルは、パレスチナ人に領土面で譲歩し、長い対立の時代に終止符を打ち、ユダヤとアラブという二つの民族の二つの国家が共存する形を実現すべきである」

イスラエル軍人として祖国防衛に生涯を捧げたシャロン(第九章を参照)は、凶弾に倒れたラビン同様、武力だけでは永遠にイスラエルの平和を実現できないことを悟り、対話と相互譲歩によって問題の解決を図ることに最後の望みを託した。

だが、それから 44 日後の 2006 年 1 月 4 日、シャロンは突然重度の脳卒中で倒れ、意識不明の重体となってしまった。

そして、ガザ地区をめぐる状況は、対話と相互譲歩による問題解決というシャロンの思惑とは正反対の方向へと急展開していくことになる。

山崎 雅弘(やまざき・まさひろ)

戦史・紛争史研究家

1967 年大阪府生まれ。軍事面に加えて政治や民族、文化、宗教など、様々な角度から過去の戦争や紛争を分析・執筆。同様の手法で現代日本の政治問題を分析する原稿を、新聞、雑誌、ネット媒体に寄稿。著書に『[新版]中東戦争全史』『1937 年の日本人』『中国共産党と人民解放軍』『天皇機関説』事件』『歴史戦と思想戦』『沈黙の子どもたち』など多数。

③国連でドイツに批判集中 ガザ紛争めぐる姿勢で(AFP, 2023年 11 月 10 日)

【AFP=時事】国連人権理事会(UN Human Rights Council)は 9 日、スイス・ジュネーブでドイツについての普遍的定期的審査(UPR)を実施した。イスラエルとパレスチナ自治区ガザ地区(Gaza Strip)の紛争について、イスラエル支持を明確に打ち出す一方、国内でパレスチナ支持派の抗議活動を禁止するドイツの姿勢に対し、主にイスラム教国から非難が相次いだ。

UPR は国連加盟国(193 か国)の人権状況を評価するもので、すべての国が 4 年ごとに審査を受ける。

ドイツは今回、断固として人権を尊重する姿勢を広く評価されたが、ガザ紛争をめぐる立場については異例ともいえる批判を浴びた。

エジプト代表のアハメド・モハラム(Ahmed Moharam)氏は「パレスチナ人の権利に関して、ドイツが取っている好ましくない立場を深く遺憾に思う」と述べた。ヨルダン代表はドイツの「不均衡な立場」を非難した。

トルコはドイツに対し、「イスラエルが戦争犯罪や人道に対する罪に使用する可能性のある軍事物資や軍装備品の提供を停止する」よう求めた。

ドイツ連邦議会人権政策・人道支援委員長で、代表団長を務めるルイズ・アムツベルク(Luise Amtsberg)氏は「ドイツにとって、イスラエルの安全保障と生存権については交渉の余地がない」と述べ、イスラエルの自衛権を繰り返し擁護した。

ドイツの UPR が行われた 9 日は、1938 年に同国で起きたユダヤ人迫害事件「水晶の夜(Kristallnacht)」から 85 年目に当たる。この事件は、第 2 次世界大戦(World War II)中のナチス・ドイツ(Nazi)による欧州のユダヤ人約 600 万人の虐殺の前兆となった。

アムツベルク氏はこの歴史を念頭に「ユダヤ人の生活を守ること、そして『二度と繰り返さない』というわが国の誓いは譲れない」と主張。この 1 か月で急増している反ユダヤ主義的な行為について「ユダヤ人はもはや安全だとは感じていない」「これを受け入れることはできない」と懸念を表明した。

また「ドイツ国民はガザ、そしてパレスチナ自治区の民間人のことも当然憂慮している」と強調した。

イスラエル代表のアディ・ファルジョン(Adi Farjon)氏は、「反ユダヤ主義の惨劇にドイツが向き合い、国内および多国間で講じている措置」を称賛した。

カタールの代表は「ドイツ国内でガザ住民を支持するデモの参加者に対する制裁などの措置」に懸念を表明。レバノン代表はドイツに対し、「自国民の表現と集会の自由をめぐる権利の尊重し、守る」よう求めた。

アムツベルク氏は「ドイツでは誰もが自由に意見を表明し、平和的にデモを行う権利がある」「(だが)犯罪行為に関しては制限がある。テロリズムを称賛すべきではない」と答えた。【翻訳編集】AFPBB News



<https://news.yahoo.co.jp/articles/c15b24a2112f3dcc61013d9f498d579fd03e6df3/images/000>

④ 関口宏「気をつけないと話していたが…」TBS が生成 AI フェイク画像報道をあらためて謝罪(日刊スポーツ、2023年11月11日)

関口宏(80)が司会を務める TBS 系「サンデーモーニング」(日曜午前 8 時)は 12 日、5 日の放送でイスラム組織ハマス幹部をめぐるインターネット上の画像を「生成 AI でつくられたフェイク画像」と放送しながら、その後誤りと認めたことについてあらためて訂正し、謝罪した。

関口は謝罪の言葉は口にしなかったが「気を引き締めてこれからもやっていきたい」と述べた。

番組の最後に、問題とされた一連の画像の問題について、水野真裕美アナウンサーが言及。「生成 AI でつくられたフェイク画像とお伝えしましたが、これらの画像は 2014 年以前から海外のネットニュースに出回っていた可能性が高いことが分かりました」と説明。「2014 年以前ですと、生成 AI と使った画像ではないものと考えられます。生成 AI による画像とお伝えしたのは誤りでした」と説明した。

これらとは別に「生成 AI による画像」と伝えたものについても「現段階では断定できる根拠がなく、断定した表現は誤りでした。訂正しておわびいたします」とし「生成 AI によるものか多角的に検証すべきでしたが確認が極めて不十分でした」と述べた。

「(企画のテーマが)生成 AI でつくられた画像に警鐘を鳴らすものであったにもかかわらず、その信ぴょう性を見極められなかったことを重く受け止め、再発防止に務めて参ります」とも述べた。

これを受けて関口がコメント。「フェイク画像、偽画像と言ってもいいが、出てきた時点から、これは気をつけなきゃいけないと話していたのですが、今回、こういうことになってしまいました。それくらい複雑ではありますが、まあ、気を引き締めてこれからもやっていきたいと思います。また来週、よろしくお願いします」と述べた。関口からは特段の謝罪の言葉はなかった。

同番組の公式サイトは 7 日「11 月 5 日放送について お詫びと訂正」と題したコメントを公表していた。番組での説明は、このコメントと同じ内容だった。



<https://news.yahoo.co.jp/articles/8b856c171d38d266de2a5a058f046d37375354a8/images/000>

⑥江川紹子さんがTBS「サンモニ」に検証・報告の必要性指摘 生成AI画像放送めぐり謝罪で(2023年11月8日)

ジャーナリスト江川紹子さんは 8 日、自身の X(旧ツイッター)を更新。TBS 系報道番組「サンデーモーニング」(日曜午前 8 時)が 5 日の放送でイスラム組織ハマス幹部のネット上の画像を「生成 AI によるフェイク画像」と指摘したものの、結果的に誤りだったとして、公式サイトに「お詫びと訂正」とするコメントを公表したことについて言及した。

「SNS 上でフェイク画像が飛び交う昨今。マスメディアはより画像や情報を精査して発信するという期待と責任が一層重くなっている。こうした間違いがなぜ起きたのか、それを検証・報告し、共有することで再発防止につなげてほしい」と投稿した。情報を精査した上での発信の必要性をメディア側に求めながら、今回の問題については間違いが起きた背景を検証して報告することで再発防止につなげていくよう、番組側に促すような内容となった。

番組公式サイトは 7 日、「11 月 5 日放送について お詫びと訂正」と題したコメントを公表。「11 月

5日に放送した『生成 AI』に関する VTR で、ハマス幹部をめぐるインターネットに投稿されていた画像について、『生成 AI でつくられたフェイク画像』とお伝えしましたが、これらの画像は、2014 年以前から海外のネットニュースなどに出回っていた可能性が非常に高いことが分かりました。よってこれらの画像は近年普及が進む『生成 AI』を使って作られた画像ではないものと考えられます。『生成 AI でつくられたフェイク画像』とお伝えしたのは誤りでした」と記した。

生成 AI をめぐっては、岸田文雄首相の声や画像を使って性的な発言をしているように見せかけた偽の動画が SNS 上で拡散していることが明らかになったばかり。



<https://news.yahoo.co.jp/articles/871c66565adb97c3b89b2133c5970f47338011bc/images/000>

⑥長崎でガザ攻撃停止を求めるスタンディング・デモ(2023年11月12日)

※安齋注・受信者のお一人の長崎の漫画家・西岡由香さんからの情報です。



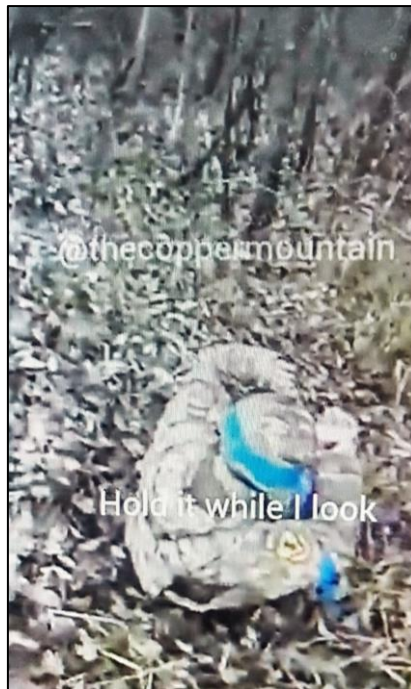
⑦「妊娠中なので叩かないでください！」(2023年11月11日)

ロシア軍はたった今、戦場で仲間の兵士たちに置き去りにされた妊娠中のウクライナ人女性を発見した!!

冗談ではなかった…

ゼレンスキー大統領は妊婦を前線に送り込んでいる」

<https://twitter.com/i/status/1723055451934212404>



<https://twitter.com/yakiimo2022/status/1723055451934212404?s=09>

⑧タッカー・カールソン Ep.35～ナイジェル・ファラージとの議論 - 自国に関心のない西側の指導者たち (2023年10月30日) 日本語字幕付き

<https://youtu.be/z6cEpxVrRO4>



<https://www.youtube.com/watch?v=z6cEpxVrRO4>